近藤久義さんの思い出と資料

孫　安石
（非文字資料研究センター　研究員）

戦前の天津の生活を経験した「老天津」の近藤久義さんが亡くなられた。私は2017年の春に近藤さんの自宅を訪問してからの3年ほどの付き合いで、その大部分は天津関連の資料（書籍、写真、絵葉書、地図などを含む）の寄贈に関わるものであったが、何よりも印象に残っている姿は、天津の資料について語る時の楽しい笑顔と生き生きとした表情であった。

私が、近藤さんが寄贈した資料のうち、「天津における抗日運動」（昭和初期、提供高津忠彦氏）と分類された写真群を紹介する論考「天津の日貨排斥運動と写真資料」（『東アジアにおける租界研究』東方書店、2020年）をまとめる時にも、近藤さんは有益な助言を惜しまなかった。この写真資料は、1928年の済南事件を前後した時期の「天津特別市党務指導委員会宣伝部」が発行し、天津の街中に掲示された日貨排斥運動に関連する伝単と宣伝画を写したもので、日本の外務省外交史料館が保存する文書類を補う重要な非文字資料であると言える。

近藤さんが寄贈した資料にはその他にも戦後の中国から引き揚げてきた関係者によって組織された名簿類などが含まれていた。例えば、南満州鉄道株式会社の関係者によって組織された満鉄会や上海の東亜同文会の関係者によって組織された滬友会などは多くの人が周知の同窓会組織であるが、近藤さんはその他に、河北省の張家口に居留した日本人の引き揚げ者によって組織された「張家口の会」や北京の国民学校に在籍した人によって組織された「北京城北会」の名簿、そして、天津会の名簿「白河」など貴重な名簿資料を保管していた。また、戦後の資料として1972年1月1日を創刊日とする『魚・水』（天津会報、B4版）というものが含まれていた。この天津会の会報『魚・水』を読んでいけば、1972年の日中国交正常化を前後した時期に、日本の全国各地に散らばった老天津の方々が「天津会結成祝賀全国大会」（1971年12月5日、東京三井ビル）を開催し、全国組織を作っていく経緯の詳細が掲載されている。当時の天津会の約款によれば、天津会は、（一）親睦、友愛、交流のための機関紙を発行し、（二）講演会、研究会を開催し、（三）社会、職場学校などからの人事相談、敬老相談などを引き受け、（四）中国語普及のための語学塾を開き、（五）天津村、天津会館を設立し、（六）天津人の物故者のための慰霊碑を建設するなど日中友好交流の促進のための全般にわたる活動を展開する意気込みであったことがわかる。

近藤さんが長年かけて収集した日本の天津関係の資料の大部分は、いまは天津市檔案館に寄贈されているが、これは近藤さんが「老天津」の一人として天津会の遺志を引き継ぎ、日中友好の架け橋となることを期待したことによるものであろうと思う。神奈川大学非文字資料研究センターには、それでも300冊以上にのぼる近藤さんの寄贈資料と各種の名簿類、写真資料などが収まっている。今後、資料の整理公開が進み、多くの方に利用される日を迎えた時に、再度、近藤さんの生前の笑顔を思い出したい。

『魚・水』（天津会報、B4版）の創刊号（1972年1月1日）、近藤久義さん提供